

オーストラリア人の日本人嫌い

経済学部 北岡孝義

私は1987年8月から1988年7月までの1年間、マクロ金融モデルの研究のためオーストラリアのシドニーに滞在した。訪問先のニュー・サウス・ウェールズ大学での研究環境の快適さもさることながら、豊かな自然に恵まれたオーストラリアでの生活はすばらしいものであった。

また、私の知り合ったオーストラリアの人たちの温かさは我々家族が異国にいることをすっかり忘れさせてくれた。彼らは最初こそよそよそしくみえたが、ひとたび打ちとけ合うととても親切で、我々こちらが有り難迷惑と感じるくらいいろいろと世話をやいてくれた。

一般にオーストラリア人は日本人に対してよい感情を持っているといってよい。事実、最近のオーストラリアでの日本語熱もこうした対日感情を反映していると思う。私の接したシドニーの若者たちは、ばくぜんとしたものではあるが国際都市東京へのあこがれをもっていたようだ。

しかし、すべてのオーストラリア人が日本人に対してよい感情を持っているわけではない。日本人嫌いのオーストラリア人もいることは確かである。事実、私自身そうしたオーストラリア人に出会って幾度か不愉快な思いをさせられたことがある。

彼らが日本人を嫌う理由は様々である。そうした理由には、アジア人全体に対するものと日本人に対するものがある。アジア人全体に対する理由としては、黄色人種に対する差別意識、働きすぎるアジア人に対する反感があり、日本人のみに対する理由としては、戦争体験にもとづく日本人への嫌悪、急速な日本人観光客の増大・日本企業進出への脅威などがある。以下では、種々のエピソードをまじえながら各々の理由について説明し、読者のオーストラリア理解に給したいと思う。

黄色人種に対する差別は白人優越意識にもとづくものであり、ひところとくらべ少なくなったと

はいえ白豪主義は根強く残っている。白豪主義のすさまじさがいかなるものであったかを知るにはオーストラリア原住民であるアボリジニの苦難の歴史をひもとけばよい。このような白豪主義が根強く残っているエピソードとしては、私の滞在中次のような事件があった。あるラジオ番組での司会者が中国人や日本人に対する差別的発言を意図的に続けて行った。あげくにはアジア人の肉体的特徴をあれこれあざ笑うという始末であった。さすがに入種差別であるとの抗議が出て、ラジオ局側もこの司会者を解雇した。新聞ではこの事件をとりあげ解雇の賛否を論じていたが、圧倒的にこの司会者を人種差別者として非難し解雇を当然とする論調が多かった。当然のこととはいえ、これはオーストラリアの良心を示すものとして私自身安堵する思いであった。ただ私には、なかば公的使命を担っているラジオ局にこのような人種差別者がいること自体驚きであった。

働きすぎのアジア人への反感は、日本人に対してよりもオーストラリアに移民してきたベトナムやカンボジア難民に対するものである。この反感はオーストラリアの精神風土とも関係している。私の住んでいたシドニー郊外のランドウィック地区でカンボジア難民の経営するパン屋があった。このパン屋はとてもおいしいという評判で大変はやっており、また朝つくったパンが売り切れるまで店を開けているというくらいよく働く。これは同業の白人にとってみれば脅威である。そもそもオーストラリアはラッキー・カントリーといわれるぐらい、あくせくして働くかなくとも食べていける幸運な国である。少なくとも白系オーストラリア人（とくにイギリス系白人）はそう考えている。生活のことをそれほど心配しないで人生を楽しむことのできる国、それがオーストラリアであると。それを一部のアジア人がオーストラリアにやってきて猛烈に働くことは、オーストラ

リア人のライフ・スタイル（ノンビリズム？）に反する行為である。これはオーストラリア人にとってはなはだおもしろくない。野党の国民党（商工民、農民などが支持基盤）のアジア系移民の増大に対する反発はこうしたオーストラリア人の気運を反映しているといえよう。

日本との戦争体験にもとづいた日本人への嫌悪はよくある。あるシドニーの高級会員制クラブには日本人は会員に認めないと規定がある。そこでこの規定は人種差別であるということで規定撤廃の投票が行われた。ところが規定の修正や撤廃のためには全員一致の賛成がいる。結果は、わずか一票の反対がありその規定の撤廃は行われなかつた。無記名投票なのでだれが反対投票をしたかわからないのだが、シドニー・モーニング・ヘラルド紙の記者は反対投票をした人を捜しだしてインタビューをした。案の定その人は日本と戦争体験のある人で、次のように答えていた。「多分私の選択はまちがっているのだろう。しかし、日本との戦争で死んでいった同僚のことを思うと日本人を許すことはできない。その日本人とクラブで席をともにすることは生理的に耐えられない。反対したのはただそれだけの理由だ。おそらくこの問題は次の世代には解決されようが、少なくとも私が会員である限り、日本人の入会には反対し続ける」と。

また、オーストラリア人に聞いた話だが、太平洋戦争初期の日本軍が戦域をニューギニアまで拡大していた頃の話である。オーストラリアは、次は日本軍がオーストラリアまで攻めてくるだろうと考えた（結果的には日本軍は攻めてこなかった）。そこでオーストラリアの戦略としては、ブリスベン（1988年万国博覧会が開催された都市）で日本軍をくいとめ、ふところのシドニー、メルボルンを守るというものであった。この戦略はブリスベン・ラインとして知られている。その際、ブリスベンが最前線になるので、当時のブリスベンの市民たちは日本人に対する恐怖をつのらせた。この日本人への恐怖心は戦後40数年経っても消えないでいる。最近のブリスベン郊外の観光地ゴールド・コーストでの日本企業の不動産買い占めに端を発する地元市民の反日運動は、このような戦争中の日本人への恐怖心が背景になっているといわれている。

最近の急速な日本人観光客の増大や日本企業の不動産買い占めも日本人への反感を生んでいる。シドニーでは半ばからかいぎみに日本人をインベーダーとよんでいる。大都市にある一流ホテルのロビーでは日本人であふれかえり、動物園では毎日コアラをみにくる日本人でいっぱいである。シドニー郊外にあるフェザデール動物園での光景は傑作であった。日本の新婚カップルが一列に並び、コアラをだいて写真をとる順番を待っている。順番がくれば係員にカメラを渡し、二人でコアラをだいている写真を取ってもらう。とり終わると、係員が「ハイ、次の方（日本語で）」といい、また次のカップルが係員にカメラを渡す。まったくの流れ作業である。このような光景をみてオーストラリア人はなんと思うだろうか。

日本企業のオーストラリアでの不動産の買い占めがどの程度のものなのか実態を調べていないので正確なことはよくわからない。一説には香港人の不動産買い占めの方がすさまじいとも聞く。しかし、最近のシドニーの地価上昇の元凶は香港人ではなく日本人の不動産買い占めであると思っているオーストラリア人が多いということだけは確かである。

以上紹介したエピソードからわかるように、オーストラリア人の日本人嫌いには、オーストラリア人自身が解決しなければならない問題と日本人自身が反省しなければならない教訓を含んでいくように思う。

肌の違いによる差別は、差別する側のオーストラリア人自身が克服していかなければならない問題である。これは現在のアボリジニの解放運動とも関係している。オーストラリアが白豪主義という亡靈から完全に解放されるか、その動向を注目したい。

オーストラリア人のアジア系移民に対する反感は転換期にあるオーストラリアの社会問題である。今、オーストラリアはアジアの一員であることを自覚し一層アジア諸国との関係を深めるとともにアジア系移民を多く受け入れ、経済的に飛躍しようと考えているアジア・サイドの人たちと、依然として西欧諸国（とくにイギリス）とのつながりを主にしてやっていこうと考えているヨーロッパ・サイドの人たちとの対立がある。経済的には、現在のオーストラリアはヨーロッパを離れ、ます

ますアジアに依存せざるをえない状況にある。アジア人への反感は、このような現在のオーストラリアの状況に対するヨーロッパ・サイドの人たちの焦りのあらわれであるとみることもできよう。

日本人に対する反感は、日本人自身が考えなければならない問題を含んでいる。戦争体験にもとづく日本人への嫌悪や恐怖心は、単に過去の問題ではなく現在の急増する日本企業進出（とくに観光業や不動産業）や日本人観光客に対する反感にも投影している。オーストラリア人は現在の日本からの経済的脅威をかつての軍事的脅威と並べさせてうけとめている。オーストラリアへ進出する日本企業はこうしたオーストラリア人感情を配慮する必要がある。

それとオーストラリア人はアメリカ人ほど日本のことを見ないように思う。現在の日本や日本人がどのようなものであるかを正確に知らないので、過去の日本人のイメージでもって現在の日本人の行動を理解しようとする傾向がなきにしもあらずである。この点、日豪の文化交流や広報活動の活発化が一層望まれる。これに関して昨年、オースト

ラリア政府の財政難からシドニーの豪日交流基金事務所が閉鎖されたのは残念である。

また、オーストラリア人の日本人嫌いについても、日本人嫌いは必ずしも日本人の本性ではない。日本人の本性は、日本人が日本人であることを誇り、日本人の優れた文化や技術を世界に広めることである。

しかし、日本人が日本人であることを誇り、日本人の優れた文化や技術を世界に広めることを嫌うことは、日本人の本性ではない。日本人が日本人であることを嫌うことは、日本人の本性ではない。

日本人が日本人であることを嫌うことは、

日本人が日本人であることを嫌うことは、日本人が日本人であることを嫌うことは、

日本人が日本人であることを嫌うことは、日本人が日本人であることを嫌うことは、

日本人が日本人であることを嫌うことは、日本人が日本人であることを嫌うことは、

日本人が日本人であることを嫌うことは、日本人が日本人であることを嫌うことは、

日本人が日本人であることを嫌うことは、日本人が日本人であることを嫌うことは、

ラリア政府の財政難からシドニーの豪日交流基金事務所が閉鎖されたのは残念である。また、オーストラリアで日本のが取り沙汰されるたびにマスコミが日本大使館の意見を求めるのだが、日本大使館がほとんどなにも言わないので大使館の怠慢であると思う。オーストラリア日本大使館はもっと声を大にして日本の立場を説明すべきである。

最後に以下のことを強調したい。それは、人種間の摩擦を理解し解決するには、慎重な態度が望まれるということである。人種間の問題には必ずといっていいほど人種差別の陰がつきまと。ここでとりあげたオーストラリア人の日本人嫌いについても、それをすべて人種差別であると糾弾するのはやさしい。しかし、問題はそれほど単純ではない。人種差別にもとづくものもあればそうでないものもある。摩擦を解消するには、相手の国

の歴史と現状を理解し、ひとつひとつのケースについて予断なく慎重に解決していく冷静な姿勢こそが望まれるのである。

